

## 2023年3月ハイパーカレンダーレポート

2023年3月WBC (World Baseball Classic) で、日本代表の活躍が多くのメディアで取り上げられた。アメリカで開催された準決勝と決勝をライブ配信したプライム・ビデオは、歴代最高の視聴者数だったと発表している。私は「にわかファン」だったが、世界中に散らばりそれぞれの国の代表となっているメジャーリーグの選手たちと戦った、日本代表の個性ある選手たちの大奮闘にとってもワクワクしたし、感動モノであった。

そんな3月は年度のまとめの月でもある。今年度は、ハイパー研として30以上の様々なプロジェクトに対して、所員の一人一人が、いろんな協力者とともに、個々の力を最大限に発揮して取り組んだ。

その中でも今年度から取り組んでいる「大分県 ICT 教育サポーター育成プラットフォーム運営事業」について報告したい。昨年4月に研修を受けた40名ほどの ICT 教育サポーターが、5月以降、大分県内58校の県立学校を週に1回訪問し、環境整備や ICT を活用した授業づくりの支援を行った。最初は、「先生たちがほとんど職員室にいない」、「忙しい先生に声をかけることができない」などでコミュニケーションを上手く取れず、サポーターにとって不安な日々が続いた。一方、教員は「何を頼んでいいのかわからない」と、様子を見ている状況でもあった。学校とは関係のなかった外部の人材が、週に1回、学校で活動していくのは、想定以上にハードルが高かったのである。月に1回、オンラインで定例会を行っているものの、サポーターは一人ひとりが別々の学校で活動するために、日々の不安な気持ちや困りを解決するのが難しい。そこでプラットフォームで SNS を構築、コミュニケーションを取り、皆で助け合った。その効果は大きく、個人がスキルアップし、それぞれが工夫しながらコメントや意見を頻りに投稿し、「ICT が苦手な方への声かけ」、「ICT 活用に向けた資料作成と配布」、「ミニ研修の開催」など、自発的な行動へと繋がった。それが活力となり、そのうち先生方からの依頼が増え、「感謝」の言葉も増えて、サポーターのやりがい感も増した。「ICT 教育サポーター育成プラットフォームは、いったい誰のものか？」現在は、サポーター自らが、自分たちのプラットフォームとして活動している。しかし、生徒が主体的に学ぶためのひとつのツールとして ICT を活用することは、指導側、学校や教員による差が大きいことを改めて実感した1年でもあった。この差を埋めるためにはどうしたらいいのか？ それは GIGA スクール以来の日本全体の課題でもある。私たちプラットフォームの真価が問われ、そして更なる工夫とレベルアップが求められているのである。

そうした状況のなか、ハイパーネットワーク社会研究所は、2023年3月29日に設立30周年記念を迎えた。30年前、インターネットの一般利用がまだこれからという時に、未来のネットワーク社会を考える研究所が大分に設立されて活動を始めたことは、「ICT を活用して地域課題を解決する」といった地方創生の考え方を先取りしていたと実感する。その3月29日に、高校生等の学生、若い世代の人たちを交えて、情報社会学をもとに、これからのハイパー研のビジョンを考える「第85回ハイパーフォーラム」を開催した。時代の変化が激しい中で、今後30年間の未来を見据えながら、「今、何をしたいのか、平和に幸せに生きるには？」をこれからも考え続けながら、新しい年度も活動していきたい。

(文責：渡辺律子)